大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正二年十月一日發行 第二卷第一號

近代思想

十月號

■自由（詩）……寒（一）
■生の道德（評論）……大杉榮（二）
■『出發前半時間』の人生觀（評論）……伊庭孝（八）
■裁判（詩）……寒村（一三）
■都會小詩（詩）……土岐哀果（一四）
■胡麻鹽頭（雜錄）……堺利彥（一六）
■郊外生活（短歌）……安成二郎（一八）
■いやな顏（詩）……德永保之助（一九）
■ある日（小說）……筒井吉久（二〇）
■『内部』と『モンナ・ヷンナ』（批評）……佐藤綠葉（二三）
■暴風雨（小說）……荒畑寒村（二五）
■大久保より（雜錄）……榮（二九）
■六雜誌瞥見（批評）……寒村（三〇）
■消息……（三二）

近代思想社
東京府下大久保百人町三五二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大正元年十月一日第三種郵便物認可　（毎月一回一日發行）　大正二年十一月一日發行　第二卷第二號

近代思想

十一月號

■獨善主義者に（詩）……寒村（一）
■科學的理想（評論）……安成貞雄（二）
■獅子と兎（小話）……安成二郎（八）
■胡麻鹽頭（雜録）……堺利彦（一二）
■伊庭孝一座（批評）……寒村（一四）
■犠（小說）……德永保之助（一六）
■小川巡查（小說）……△○生（二一）
■大久保より（雜録）……榮（二五）
■新刊（批評）……記者（二五）
■虐殺の翌朝（小說）……荒畑寒村（二六）
■寄贈雜誌……（三一）

近代思想社
東京府下大久保百人町三五二

大正元年十月一日第三種郵便物認可（每月一回一日發行）大正二年十月一日發行 第二卷第一號

近代思想

十月號

■自由（詩）……寒村（一）
■生の道德（評論）……大杉榮（二）
■『出發前半時間』の人生觀（評論）……伊庭孝（八）
■裁判（詩）……寒村（一三）
■都會小詩（詩）……土岐哀果（一四）
■胡麻鹽頭（雜錄）……堺利彦（一六）
■郊外生活（短歌）……安成二郎（一八）
■いやな顏（詩）……德永保之助（一九）
■ある日（小說）……筒井吉久（二〇）
■『內部』と『モンナ・ヴンナ』（批評）……佐藤綠葉（二三）
■暴風雨（小說）……荒畑寒村（二五）
■大久保より（雜錄）……榮（二九）
■六雜誌瞥見（批評）……寒村（三〇）
■消息……（三二）

近代思想社
東京府下大久保百人町三五二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Asia Library
AP
95
J2
K47
no.13

新音譜賣出し

鳴渡れり!! 噫々鳴渡れり!! ニツポノホン
蓄音機の美音は實に寒村僻地に鳴渡れり!!

何の故ぞや。此れ其工場に於て多年研究に腐心し之が改良進歩に心膽を碎きし賜に外ならざるなり
弊社は華客の趣向を旨とし嶄新なる音曲を選び玆に滿天下に紹介せんとす

●**ドンブラコ**。（桃太郎一代記）帝國歌劇部員演奏 北村季晴氏及初子女史 七、八、九、十（鷲印兩面盤）
七月賣出しに兒童諸君の大喝釆を得たる**ドンブラコ**は注文雨の如くに繁し玆に引續き四種の賣出しを試みんとす

●**和洋合奏**（越後獅子、上、下、吾妻八景、娘道成寺）丹誤倶樂部員演奏（鷲印兩面盤）
丹誤倶樂部員の苦心の跡歴々たり和洋兩樂の調和誠に巧妙吾れを忘れて舞躍るの感あり

●**浪花節**（大高源吾、山鹿護送道中付上、中、下 西郷南洲 上、下）東家樂燕（赤鷲印兩面盤）
浪界の尤物東家樂燕現はれたり心身共に溶けんばかりの聲調

●**唱歌**（小學唱歌二宮金次郎、よく學びよく遊べ、雲雀 田植、蟬、浦島太郎、案山子、富士山、仁田四郎、雪）（赤鷲印兩面盤）
納所文子孃の玲瓏たる聲音文部省發行の小學唱歌十種兒童諸君の好侶伴たり

●**軍樂隊**（Valse, Loin du Bal, Cavaleria Rusticana Seleetion）陸軍戸山學校軍樂隊（鷲印兩面盤）
世界に覇を爭はんとする戸山學校軍樂隊が其最得意とせる洋樂二種聽いて血沸き肉躍るの感あり

鷲印兩面盤　金壹圓五拾錢
赤鷲印兩面盤　金貳圓也

全國四十の出張所と四百の特約店あり

神奈川縣川崎町
株式會社 日本蓄音器商會本店
電話川崎四九番

東京銀座一丁目
全卸賣及小賣部
電話京橋二二五七・二五八・二八八七番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

村上専精先生序
久津見厥村兄跋
藤岡勝二兄跋
田中治六兄跋

高島米峰新著

噴火口

三六判美装
定價八十錢
郵税八錢

著者心内に欝積する熱火今や轟然として爆發しこゝに礫となり砂となり灰となりて四方に飛散すこれを惨狀と言ふべきかこれを偉觀と稱すべきか敢て讀者の批判に待たむと冀ふ蓋し著者の前著「廣長舌」「惡戰」等に比し來つてその愚論惡文更に一段の進境あることを看取し得む

▲高島米峰著（好評四版）
廣長舌
定價七十錢 郵税八錢

▲高島米峰著（好評五版）
一休和尚傳
定價九十錢 郵税八錢

▲高崎米峰著（新刊）
現代青年論
定價十五錢 郵税二錢

▲高島米峰著（好評二版）
理想的商業
定價廿五錢 郵税二錢

▲高島米峰著（好評四版）
惡戰
定價八十錢 郵税八錢

▲學生參考 高島米峰著（好評十三版）
東洋史
定價十三錢 郵税二錢

東京小石川區原町六 振替東京一五八六六
丙午出版社

東京小石川區原町六 振替東京一三五三
鷄聲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

▲▲吾人の藝術をして
實生活に驀進せしめ渾一せしめよ

■第二號發行■

第一號初版忽賣切再版發行

■

菊判七十二頁
定價一冊十八錢
送費一錢
三ヶ月分五十四錢

生活と藝術

■彼れは殺された（評論）……土岐哀果
□世の中に告ぐ……哀果
■秋風の中に（歌）……高山辰三
■ある男の死（小説）……佐藤緑葉
□掌（歌）……大熊信行
■偶成三篇（詩）……西村陽吉
■鷗外先生を論す（評論）……伊庭孝
□沈默せる銀座（詩）……德永宗之助
■影像の職人（紹介）……仲田勝之助
■女菩薩論（評論）……笹川潔
□家族を連れて（通信）……上司小劍
■MEMO……哀果
■倉の中の男（ミルボオ）……大杉榮

發行所 東京市日本橋區檜物町九（振替東京五六一四番） 東雲堂

青鞜 十月號

十月號內容

少數と多數（論文）エンマゴルドマン
戀愛の進化（同）エルレン、ケイ
女性に於ける性的轉倒（同）エリス
イワノフ（戲曲）チエホフ 瀬沼夏葉譯
響の影（飜譯）マツコア 伊藤野枝譯
モンナヴンナ（戲曲）社員

小說 加藤みどり 小笠原貞 長谷川時雨

短歌 藤波一枝 柴田かよ 岡本かの 片野珠 其他同人

動搖と索引を讀みて らいてう
染井より 野枝
編輯室より 同人

■定價一冊金廿五錢・送料一錢五厘■

發行所 東京市日本橋區檜物町九（振替東京五六一四一番）東雲堂書店

青鞜社補助團 會員募集 自九月一日 十月三十日限

□青鞜社補助團は青鞜社の事業を完成せしめんが爲經濟上の補助をなすを以て目的とす
□甲種會員 一ヶ月會費 壹圓
□乙種會員 一ヶ月會費 五拾錢
□本團は會員に對し青鞜社發行の機關雜誌「青鞜」を每號贈呈す。
□甲種會員には會費全納後なほ滿二ヶ年間雜誌「青鞜」と青鞜社出版の圖書とを其都度贈呈す。
□乙種會員には滿二年間雜誌「青鞜」のみを贈呈す
□本團員は甲、乙に拘はらず女子に限りて「青鞜」に寄稿し得るの特權を有す。
但し寄稿が二回以上「青鞜」誌上に揭載されたる場合は本人の希望により相當の手續きを得て「青鞜」の社員たることを得。
□入會申込希望者は二錢切手封入府下巢鴨一、一六三青鞜社內補助團宛申込まるれば明細なる規則書進呈す。

九月一日

府下巢鴨町巢鴨一一六三
青鞜社

ドストエフスキー作　内田魯庵譯

罪と罰

前編

四六判ポイント式印刷五五〇頁
正價金壹圓四拾錢〇郵税十二錢

本書の著はされたる「一八六六年以後英國及び佛國に於て出版されたる所謂心理的又解剖的小説の總て」がド氏の熾烈なる表現と比較して顔色なく生氣なきのみならず一として其の偉いなるヒユーマニチーの（一滴）若くは其の床しき至善の「一呼吸をだに有するものあるなし」と、是れモーリス●ベーリング氏の本書に對する批評の一節也

東京〇大阪〇京都〇福岡

丸善株式會社

213-442254

第二巻第一號

自由

氣の違つた世界だ。

永い間、
人々が自由を絶叫してゐるのに、
奴隷貿易は盛んだつた。

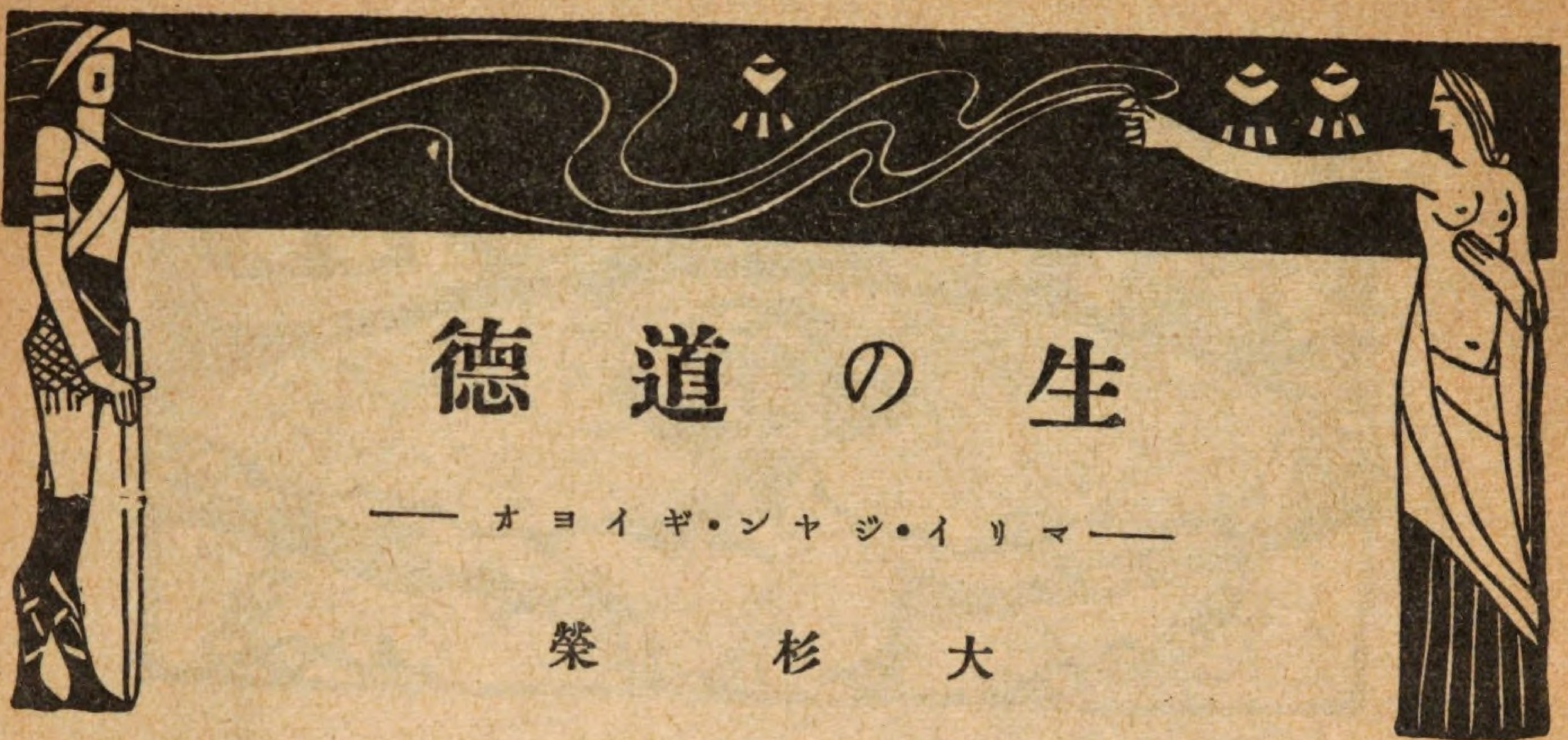
更に永い間、
人々はその同胞を賣買しながら、
猶ほ自由と呼んだ。

奴隷といふ語が廢せられてからも、
一層永い間、
人々はその同胞を抑壓し、
その平等な生存の機會を奪ひ、
そして猶ほ自由を叫ぶ。

それでゐて、
誰も笑ひもしない―惡魔の外―。

―(エルネスト・クロスビー)―
(寒村　譯)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



生の道徳

——マリイ・ジャン・ギイヨオ——

大杉榮

此の一篇は Marie-Jean Guyau 著 Esquisse d'une morale sans obligation ni sanction『道徳無義務無賞罰論』の決論の一章を直譯したものだ。

此の本の事は、今年であつたか去年であつたか、たしか丁酉倫理會の講演集に、道徳無義務論と云ふ題で、誰れかの大ぶ詳しい紹介があつた筈だ。

勿論結論だけを見るのは、あまり面白くない態度には違いない。僕自身も之れを飜譯したあとで、甚だ物足りない、アツケない感じのしないではない。寧ろ其の本文の中の何處か一章をやつた方がよかつたとも思つたが、もう其のひまもないので、仕方なしに此のまゝ載せる事にした。しかし之れだけでも、猶ギイヨオの道徳論の大体を知り且ついろ／＼な暗示を得るだけには十分だとも思ふ。

ギイヨオの道徳論は大ぶあちこちの近代思想に影響を及ぼしたものだ。

クロポトキンの倫理觀なぞは、其の根底に於て殆んどギイヨオ其儘と云つてもいゝ程の所がある。そしてクロポトキンは猶其の著書の中に『餘りに若くして死んだ哲學者』だとか、或は『自ら知らざりし無政府主義者』だとか云つて、餘程其の説を引用し且つ推奬してゐる。

又ニイチエなぞは、其の著書の中にこそ殆んどギイヨオの名は出してゐないが、此の『道徳無義務無賞罰論』や『將來の無宗敎』なぞは餘程愛讀したものと見えて、フヱルスター・ニイチエ夫人の所藏する此等の本には、殆んど隙間もない程に書入れがしてあると云ふ。そしてギイヨオの師でもあり、又繼父でもあつたアルフレド・フウイエに據れば、其の書入れは殆んど讃歎にまで行つた同情の文句だと云ふ。猶此の事に就いては、フウイエ著 Nietzsche et l'immoralisme（ニイチエと反道徳論）の序論及第三章に詳しく載つてゐる。

ベルグソンを讀んでも、一見して直ちに其のギイヨオとの類似が見出される。時としては殆んど同樣の文句すら、あちこちに見出される。そしてベルグソンの創見のやうに云はれてゐる彼の時間論の如きも、同じくフウイエに據れば、既にギイヨオの著 La genèse de l'idée de temps（時の觀念の由來）の中に、もつと綿密に説かれてある事だと云ふ。

又トルストイの藝術論なぞは、自らはギ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

イヨオの『現代美學の諸問題』のみを擧げてゐるが、實はもう一つの『社會學的見地より觀たる藝術論』にも、餘程負ふ所ある事は疑はれない。

ギイヨオは哲學者と美學者と教育家と詩人とを兼ねてゐた。そして其の著者の多くは、夫れ夫れの方面に於ける尠からざる權威あるものである。

道德論としては、先づ此の『無義務論』を推すべく、哲學論としては L'irréligion de l'avenir (將來の無宗教)あり、美學論としては Les problèmes de l'esthétique contemporaine (現代美學の諸問題) あり、又 L'art au point de vue sociologique (社會學的見地より觀たる藝術)あり、教育學としては Education et Hérédité (教育と遺傳)あり、心理學論としては先きに云つた『時の觀念の由來』がある。そして其の Lecture courante と題する可愛らしい小學讀本の如きは、我が日本の諸學校にも教科書として用ひられてゐる。次手に云つて置くが、之れも日本のあちこちの學校で教科書に使つてゐる、Le tour de la France par deux enfants (少年佛國週遊記)は、ギイヨオの母、フウイエの妻の著書である。

猶ギイヨオの著書は、獨乙譯と露西亞譯とには其の全集がある。英譯も主なものは大概ある。

又ギイヨオを紹介し評論したものには、先づ Alfred Fouillée の La morale, l'art et la religion d'après Guyau (ギイヨオの道德藝術及宗教論) を最善とする。

ギイヨオは、一八五四年十月廿八日に生れ、一八八八年三月卅一日、三十三歳にして逝つた。

一

自分の目的は、何等絕對的義務のない、又何等絕對的賞罰のない道德の如何なるものなるか、又其の研究の道に於て、實驗科學が何處まで行き得るか、及び形而上學的臆測の領域が何處で始まるかを究める事であつた。

先づ自分は、方法としては、事實に先在する又それを卓越する、從つて先天的なる且つ至上的なる一切の法則を退けて、事實其物から出發して其處から法則を求め、現實から出發して其處から理想を求め、人性から出發して其處から道義を求めればならぬものとした。

此の方針は必然に二重の性質を齎らして來る。それは生其物が、人間の中に、云はば無意識的生と意識的生との二重になつてゐるからである。倫理學者の多數は意識の領域の外を餘り顧みない。しかし人間活動の眞底は無意識である、次意識である。尤も意識は、遺傳の朦朧とした綜合が個人或は民族の中に蓄積したものに、自らの分析の光によつて、長い間には反動し、且つ漸々に之れを破壞する事が出來る。又意識は、功利派も進化論派すらも此の事は十分に考察してゐないが、物を溶解する力を持つてゐる。そこで意識の反省と無意識的本能の自發との間に調和を立てる必要が生じて來る。即ち彼の兩域に共通する、從つて自己意識を爲すと共に自らを破壞するよりは寧ろ強固にするやうな、行爲の原則を見出さればならぬ。

二

此の原則を、自分は、肉體的及び精神的に最も擴充した生、と云ふ所に見出したと信ずる。生は、自己及び其の擴充を意識しつゝ、自らを破壞するものではない。斯くしつゝ、生は自らの力を增進さすばかりで

ある。

けれども又、生の領域の中には、幸福の爲めに又時としては生存の爲めに、各個人を闘爭せしめ、あらゆる生物を競爭せしめる事によつて生ずる、種々の撞着がある。自然界に於ては彼の生存競爭の撞着が何處にも解決せられてゐない。そこで倫理學者の夢想は、之れを解決し、或は少なくとも、之れを出來るだけ輕減すると云ふ事になる。

此の爲めに倫理學者は、生其物を卓越した法則、可想の、永遠の、超自然の法則を賴み込まうとした。斯う云ふ法則は、自分は、少なくとも法則としては、之れを賴る事を止した。自分は可想的世界を假定の世界の中に逐ひ据えた。そして法則が降つて來るのは假定からではないのである。

こゝに於て再び自分は、生を整調する爲めには生に夫れを訴へねばならぬ事となつた。そして又、より少なく完全なる又より少なく廣き生を整調し得るものは。より多く完全なる又より多く廣き生である。斯くの如きもの是れ實に、全く科學的なる道德の、唯一の可能なる規矩である。

三

倫理學者の化金石とする一致、即ち利已心と愛他心とを或る程度まで一致さす事を自分に許してくれる、生の一特性がある。そして自分は夫れを道德的多產と名づけて置いた。

個人の生は、他人の爲に、他人の中に、擴がつて行かねばならぬ。又必要に應じては自らの生を擲たねばならぬ。しかし此の擴大は生の本來に反した事ではない。却つて其の本來に從つた事である。更に進んでは、之れが眞の生の要件ですらもある。功利派は、我れと汝、我がものと汝のもの、個人的利害と一般的利害との此の永遠の矛盾の前に、多少たじろぎながら、行きつまつて了つた。然し生きたる自然は、此の截然たるそして論理的には如何にともすべからざる分離の前にも、敢て行きつまらぬ。即ち個人の生は、其の多產なるが故に、他人の爲めに擴がり行くのである。又其の生が生たる故にこそ多產なのである。

肉体に就て云へば、先きに本文にも云つた如く、他の個人を產むと云ふ事は、此の他人が我れ自身の要件でゝもあるかのやうに、其の個人的欲望なのである。生は、火の如く、移つて行つて始めて自らを保存する。

そして之は智識に就いても矢張り肉體に於けると同じく眞實である。智識も焰と同じく自已の中に閉ぢ籠つてゐる事は出來ない。智識は放射するやうに出來たものである。

感情にも亦同樣の擴大力がある。吾々は吾々の喜びを分たねばならぬ。吾々の悲しみを分たねばならぬ。吾々の全存在が社交的なのである。

生は論理學者や形而上學者の絕對的分離や分類を知らぬ。生は全く利已主義者になる事は、ならうと思つてすらも、出來ぬ。吾々は四方開け放しである。四方から侵入し又侵入される。之れは生物學が吾々に與へた、生は自らを營養するばかりでなく又產出する、多產すると云ふ、根本的法則に據る。生きるとは、收得する事であると共に又消費する事である。

四

生理的及び心理的生の此の一般的法則を説いた自分は、更に如何にして之れから

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

義務の代用物とも云ふべきものを生ぜしめ得るかを論じた。

絶對的命令とか超自然的法則とかを認めない人にとつて、要するに義務とは何んだらう。それは衝動の一形式ではあるまいか、現に『道德的義務』とか、『義理』とか、『道德法』とか云ふものを分折して見るが善い。彼等に能動的性質を與へるものは、彼等と離す事の出來ない衝動である。運動を要求する力である。然らば彼の超自然的義務の第一の自然的相當物であると思はれるのは此の衝動力でなければならぬ。

功利學者は今猶あまりに結果の考察にばかり凝り固まつてゐる。彼等は、結局は快樂に歸する、功利と云ふ目的に溺れ込んでゐる。彼等は快樂主義者である。詳言すれば、利己或は同情の形式の下に、快樂を精神的生活の大なる原動力と爲すものである。自分は之れと反對に、結果ではなく、ある有力なる原因に著眼する。自分は、目的としての快樂の引力が働く前に、或る原因の働く事を自分の中に認める。此の原因とは、即ち其の本來の性質其物によつて增進し擴大せんとする、そして其の結果としては快樂を見出すが、しかし必ずしもそれを目的としない、生がそれなのである。

生物は純粹に又單純にベンザム派の勘定家ではない。其の大きな帳簿に損得の清算をする銀行屋ではない。生きるとは計算する事ではない。活動する事である。生物のからだの中には、消費する快樂の爲めでなく、消費されればならぬが故に消費される、力の蓄積がある、活動の貯蓄がある。原因は、目的を考ふる事なくとも、其の成果を生ぜざるを得ざるものである。

五

斯くして自分は、自分の根本的範式に到着した。即ち義務とは、必然に行爲に移る可き力の、間違つた言表しに過ぎない。吾々が義務と名づけたものは、それがあり得べき所のものであり且つ既に現在を溢れた將來の芽であるが故に、現實を超えて、現實に對する理想となり、あらればならぬ所のものとなつた力を指すに外ならぬ。自分の道德の中には超自然的なる何等の原則もない。生其物の道德であゝ。一切を生ずる生其物の力の道德である。生は不斷に發展せんとする其の渴想によつて、自ら其の法則をつくる。生は其の活動力によつて、其の活動すべき義務を自ら造る。

自分は說いた。我れ負ふ、故に我れ能ふ、と云ふ代りに、我れ能ふ、故に我れ負ふ、と云ふ方が更に眞實であると。そこで活動力其物によつて創られた或る非人格的義務が存在する事となる。是れ即ち神秘的なる超自然的なる義務の第一の自然的相當物である。

第二の相當物は、自分は、現代の或る一哲學者が主張した觀念力論の中に、之れを見出した。卓越せる行爲の觀念其物は、あらゆる行爲の觀念と等しく、其の觀念を實現せしめんとする力である。觀念其物は既に卓越せる行爲の實現の始まりである。

此の見地よりすれば、義務とは思想と行爲との事に存する深い一致の感情に外ならぬ。即ち又、存在の統一、生の統一の感情である。其の最高の思想に其の行爲を適合せしめざるものは、自ら自らと鬪ひつゝあるものである。內的に分離したものである。

此の點に於ても亦、快樂主義は遅れてゐる。快樂を計算するのではない。勘定や目的を逐ふのではない。存在する事なのだ。生きる事なのだ。存在してゐると感ずる事なのだ。生きてゐると自ら感ずる事なのだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

存在するまゝに、生きてゐるまゝに活動する事なのだ。行爲に於て虛僞なからしめる事なのだ。行爲に於て眞實ならしめる事なのだ。

六

義務の第三相當物は、上述の如き智識又は行爲からではなく、こんどは感情から借りて來た。夫れは感情の益々融合して行く事である。高尙なる快樂の常に益々社交的ならんとする特性である。吾々をして自然に且つ合理的に他人に向はしめる、卓越せる必然、即ち一種の義務は、實に此處に由來する。進化のお蔭で、吾々の快樂は益々廣大となり且つ非人格的となる。吾々は無人島や又は吾々の自我の中で享樂する事は出來ない。吾々が日々最も善く自分を適應せしめてゐる環境は、即ち人類社會である。そして吾々は、此の環境の外に在つては、空氣の外で呼吸すると同じく、幸福である事は出來ない。エピキユラスの輩の純粹に利己的なる幸福は妄想である、抽象である、不可能である。眞の人類の幸福は、萬人が多少社會的なる事である。純粹の利己主義は、先きにも云へるが如く、自己の眞の肯定に非ずして、自己の殘害である。

斯くの如く吾々の行爲、吾々の智識、吾々の感情の中には、愛他的方向に働く强壓があるのである。星の中に働いてゐる力と同じ强大な力があるのである。そして此の擴大力が其の力の自覺を得て、それに義務と云ふ名がついたのである。

此の自然的自發の寶庫が、生であり、又同時に道德的富を創るのだ。けれども本文の中にも云つた如く、他人へ向う此の擴大力が偶々自己の上への引力と矛盾する時、反省は此の自然的自發に反對して、社交性の力と義務とを全く拘束しやうとする事がある。生の闘爭は如何に進化の進步によつて輕減せられても、矢張り或る場合には殺び現はれて來る。それは今日と雖も猶甚だ屢々ある事である。果して然らば、彼の至上的法則なくして、如何にして個人を、全々無私に、又時としては自己犧牲にまで誘引する事が出來るのだらうか。

七

自分が先きに述べた、そしていつも順當な情勢の中に働いてゐる此等の動力の外に、猶自分は、肉体的冒險及び精神的冒險の愛と名づける他の動力のある事を見出した。人間は、理論に於てばかりでなく又實行に於ても、スペキユラシヨンを好むものである。其の思想も又其の行爲も、確實の止まる所に、その爲めに止まるものではない。純粹のスペキユラテイヴな假定が、何んの危險もなく、至上的法則に代用せられる事が出來る。同樣に又、純粹の希望が理論的信仰に代り、活動が肯定に代る。スペキユラテイヴな假定は思想の冒險である。此の假定に適合する活動は意志の冒險である。卓越せる人物とは、或は其の思想により或は其の活動によりて、最も冒險し最も企圖するものゝ謂である。此の卓越は、其の人物が内的力の最も大なる資庫を有する事から來る。彼れには爲し得べき力が多い。從つて彼れは卓越せる義務を有する。

生の犧牲と云ふ事すらも、或る場合に於ては、卑劣なる幾年かの生涯よりも寧ろ崇高なる激情の飛躍を撰ぶ程充實した、生の擴大であり得る。されば本文にも云つた如く、我れ生く、我れ生きたりきの二語を同時に云ひ得る時があるのである。或る肉体的及び精神的苦悶を多年の間續ける時、又全生涯の間云はゞ死にかゝつてゐると云ふ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

が如き時には、其の逆も亦眞實である。そして一生涯を愛と犧牲との一瞬時に集中し得るのである。

八

最後に、生は其の活動力其物によりて自らの活動の義務をつくると共に、又、其の行爲其物によりて自らの賞罰を爲すものである。何となれば、生は活動しつゝ自己を享樂する。活動する事小なれば其の享樂も亦小である。活動する事更に大なれば其の享樂も亦更に大である。自らを擲つてすら、猶生は更に自らを見出す。死んですら猶生は、世界に於ては何物も消滅する事なきが故に、他の形式の下に、他の所に、不滅の者となつて再現する其の充實を自覺する。

之れを要するに、抽象的思想の提出する諸問題を、全部若しくは少なくとも部分的に解決し得るものは、其生の力と活動とである。道德又は形而上學に於ける懷疑論者は、自らも又他の總ての者も、皆な迷へりと信じ、人類は常に迷ひ行くものと信じ、所謂進歩とは同一の場所を足踏みする事であると信じてゐる。けれども彼れは誤まつてゐる。彼れは、吾々の祖先が、其の嘗つて陷いれる誤謬を吾々に免れしめる事を知らない。そして彼れは、吾々も亦子孫に吾々の誤謬を免れしめるのであると云ふ事を知らない。彼れは又、あらゆる誤謬の中に或る眞理があると云ふ事を知らない。そして此の小なる眞理の部分が、漸次に增大し確立して行く事も知らない。又理論的信仰を有する者は、他の一切の人々を取除けにして、自分のみが全き、確定せる、至上的なる眞理を所有すると信じてゐる。けれども彼れは誤まつてゐる。彼れは一切の眞理の中に誤謬の混つてゐる事を知らない。人類の思想には猶確立したと云ふ程の完全なる何物もない事を知らない。先きの人々は人類が進行しないと信じ、此の後者は既に到著したと信じてゐる。しかし此の二つの假定の中間があるのである。人類は進行しつゝある、自ら進行しつゝあると云はればならぬのだ。勞働は、或る人の云つた如く、祈禱と同じ價がある。祈禱よりも以上の價がある。或は寧ろ之れが眞實の祈禱、人間の眞實の攝理なのである。祈禱する代りに活動するが善い。吾々自身中に他の人々の中に希望を持て。吾々自身を信頼せよ。希望は、攝理と等しく、時として其の前方を見る。providereする。超自然的攝理と自然的攝理との差異は、一は同じく超自然的方法によつて直ちに自然を改變せんとし、一は先づ吾々自身のみを改變する事に在る。力は吾々を卓越したものではない。却つて劣つたものである。そして此の力が吾々を前方へ進まして行くのである。吾々が吾々のみで行くが、世界が吾々に隨いて行くか、將來思想が自然を引つぱつて行き得るかは、まだ疑問として、殘つてゐる。吾々として常に前進せしめよ。吾々は、波に舵を奪はれ、風に帆柱を倒されたるレヴイエタンの上にゐるやうなものだ。船は大洋の中にさ迷つた。吾々の地球も空間の中にさ迷つてゐる。斯くしては、暴風のまに〳〵、人を乘せた漂流物のやうに、運に任せて行つた。しかし兎も角も到着した。恐らくは吾々の地球も、恐らくば我が人類も、亦其の自ら創るに違いない知られざる目的に到着する事であらう。如何なる手も吾々を導かない。如何なる眼も吾々を見守らない。舵は久しき以前から碎かれた。或は始めから全く無かつたのだ。吾々は夫れを造らねばならぬ。是れ實に一大事業である。そして又吾々の事業である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『出發前半時間』の人生観

伊庭孝

一

徹底した主張は、往々にして、反語的諷刺と見做される。主張する人自身にも、それが諷刺でない事を斷言出來ぬ程に徹底したる主張が爲される事がある。「出發前半時間」の主人公である宮廷唱歌役者(カムマアゼンガア)オスカル●ジエラルドオの主張は即ち徹底した思想であるとしても、作者たるヱデキントの計畫が、諷刺で無かつたといふ事を誰も斷言する事は出來ない。其辨別はたゞ鑑賞者の主觀的狀態によるのである。主張に直接に同感し得る人は、主張を即ライトモチイフと思ひ、同感し得ずとも其の思想を解し得る人は之をイロニイと思ひ、常識家、折衷家は每に之を排斥する。けれども主張が藝術として取扱はるゝ場合は、常に常識家に排斥せらるゝ場合に限る。たゞ區別は、それが直接の主張であるか、諷刺であるかといふ事が問題として殘る。而して今日に於ては、諷刺の藝術が、直截に主張する藝術よりも尙ばれる傾向を有してゐるものとすれば、あらゆる此の種の藝術品は、之を諷刺なりとした方が、批評者をして更に高級な者の如く見せしむるかもしれない。然し時としては、その藝術品の固有な價値を下げるとしても、表白せられた主張を眞面目な直截な哲學として取扱ふ事も愉快でない事はない。ジエラルドオの性格も亦、吾人の哲學から構成せられたと思はるゝ處が甚だ多いのである。

二

役者ジエラルドオの哲學は、世の中は必然のみによつて支配せられてゐるといふのである。彼は人間の欲望、希望などは、自然の方向を轉換せしむる事に對して何等の力がないと信じてゐる。努力をして、自然に打克つて、自由な意志で、いかなる事をもす可きではないといつてゐる。故に彼は、自分の歌に惚れ込んで、自分の處へ忍んで來た、ミス●キョルヌに對つて、かういつた。二年もたてばあなたにはお婿さんが來る。そのお婿さんによつて男といふものゝ經驗を得るがいゝ、赤の他

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

人の自分の處へ、克己して、外聞を忘れて忍んで來てまで、努力して人生を知らうとするには及ばない……。

彼は少女に諭すやうに、自身の生活も、必然から割り出した生活をした。彼の生立は、決して始めから藝術家になるやうに向きかゝつてゐるやうな種類のものではなかつた。彼は卑賤な家に生れて、子供の時からパンの爲めに働かねばならぬ境遇にあつた。經師屋の小僧であつた彼は、少しも職業に對して不平も抱かなかつた。毎日紙と糊とをもつて、注文主の命令に服從しながら爲事に從事してゐた。彼は卑しい經師屋の職を恥かしいとも思はず、自分で努力して向上しやうとも心掛けなかつた。たゞその日その日の爲事は、誰がなんと云つても缺點のないやうに整へて、そして新しい明日を特殊な期待もなしに迎へてゐた。彼にはたゞ義務があるばかりである。希望や野心は彼には禁物であつた。若し外部から、彼の手を引張つて、もつと光明のある世界へ彼を引出す者がなかつたら、彼は甘んじて生涯を經師屋の徒弟で暮してゐて、誰に對しても義務を果してゐる者の滿足と權威とをもつてゐたものに違ひない。

三

運命は彼をいつ迄も經師屋の小僧にはして置かなかつた。彼が自分の職業に從事しながら、心やりに歌つた無心の旋律が、或る好事者の耳にとまつた。好事者は彼に對して、その天賦の聲音を利用して、唱歌者になるやうに勸めた。若しその人が、たゞ單に勸めたゞけであつたらば、たゞ單に彼を賞讃したゞけであつたらば、彼は冷淡な通一遍の「有り難う」だけの挨拶をして、そんな言葉は念頭から放擲して、刷毛と糊とを放さなかつたであらう。然しその人は彼に利益ある提供をした。金になる筋道を立てゝやつた。彼は少くも唱歌者が經師屋の小僧よりも市價の高いものである事を知つてゐる以上は、勿論之に從つた。更に多くの報酬を得る爲に更に複雜なる義務を負はせられてもそれは彼の否む處ではない。どんなに義務は多くとも、人間の支拂ふ報酬に對して、人間の盡し能はざる義務はない筈だ。報酬が上れば義務が增す彼は此の單純な理法を信じて、處世の苦痛を訴へる人人を、貪婪だと見なしてゐた。怠惰だと見な

してゐた。

唱歌者であることは、經師屋の小僧である事よりも、いろ〳〵の誘惑がある。藝術家である以上は、自分の趣好を藝術の上に表はしたいといふのが第一の誘惑である。彼は第一の誘惑を却けた、大金をもつて興行主に抱へられてゐる以上は、興行主の趣好に從はねばならない。それが唱歌者の義務である。而して興行主は衆愚の聲に動かされる最初の人である。而してテノルの唱歌者が、貴婦人間になくてならぬ贅澤品である以上は、貴婦人間の趣好であるワグナアの樂劇をもつて彼の職業上の商品としなければならない。おなじテノルを唱ふにしても、イタリヤのオペラ唄ひのやうに、感傷的な、下品な歌ひ方は許されない。上品に歌はなくてはならない。彼はワグナアの唱歌者であることをもつて、現實を滿足してゐる。彼が、現今のワグナアの音樂がまだまだ生命があると信じてゐる以上は、彼は決して、危險を冒して新音樂の殉死者にならうとは思はない。

彼は藝術といふものは、公衆が勝手に製造した標牒に過ぎないと思つてゐる。公衆は藝術の内容を解して、その内容から論理的に演繹して藝術品に對して價をつけるものではないと信じてゐる。藝術を嗜むと稱してゐる實は少しも知らない多數の藝術愛好者の間には、隱然たる大勢力を有する群衆的心理が潛在してゐて、これが藝術に對して市の價を定める。或は大劇場の興行主が、廣告や、示威や、あらゆる手段で、衆俗を釣り出す事もある。或は眞に俗衆の藝術的要求にふれた新藝術の提出せられる場合もある。或は慣習を踏襲して、俗衆の理解力を更に勞せしめずして快感を與ふ可き藝術が與へられる場合もある。ともかく、或る權力が、藝術家の藝術的良心以外にあつて、公衆の要求に最も忠實なる藝術家、換言すれば、興行主に對して最も明確を盡してゐる藝術家が、最も市價の高い藝術家であると信じてゐるのが、ジエラルドオである。故に彼は、興行主に對する義務即ち其の義務を明瞭に表象してゐるのが契約書であるが故に、契約書の内容を履行する事が藝術家の最大の責任であり、能事であると信じてゐる。

彼はその契約書に衝突しない程度に於ては、どんな事をも爲し得ると丈は信じて、隨分亂暴な眞似

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

もした。けれども契約書は隨分小六ヶ敷いものである。契約書の許す自由は、人生全体から見れば非常に小さなものである事は勿論である。

四

彼は偶然を信じない。天才を信じない。名譽を信じない。凡ての藝術は、金に換算せられる時に始めて價値をもつてゐると信じてゐる。お前は天才だと賞められる事は、お前は馬鹿だと罵られる事が、何等の損害とならぬ程度に、何等の利益になるものでなく、何等の權據になるものでないとしてゐる。彼は自分の才能をも信じない。ただ彼は自分が、興行者に對して忠實な、注文通りな供給者であるとしか信じて居らぬ。故に、彼は自分が天才であらうがあるまいが、興行主といふ、需要者を代表者をして、需要と供給者との中間に立つ劇場を支配してゐる大勢力から、見放される事が一番の苦痛であり、致命傷である。いかにして興行主と自分との關繫を安固ならしむ可きかといふ事が彼の努力の燒點である。供給者は自分自身に都合よき品物を製作して、換言すれば私用價値に富む商品を提供して、之を需用者に强賣を試みる事は出來ない。需用者の私用價値に富むもの即ち供給者から見れば、即ち交換價値のあるものを提供しなくては、決して市の價は生じない。藝術家として認められない。藝術界の城壁の中へはいれない。而してその交換價値を有する商品とはどんなものであるかといへば、極めて平凡なものでなくてはならない。ありきたりものでなくてはならない。少くとも需要者に容易に合點のいく代物でなくてはならない。さういふものは天才を要しない。誰にでも出來る。しかしこゝに一つむづかしい事がある。之を需要者を代表する興行主に賣渡す手段である。これが一番むづかしい。興行主は、第一に利益を標準とする。藝術家養成、藝術家掩護といふやうな迂遠な考は持つてゐない。試みをして、世間の眠つてゐる眼を覺醒しやうなどといふ熱心もない。そんな冒險をする丈の度量もない。彼等は流行の作者でなければ相手にしない。彼等は自分たちの見ぬいてゐる人達でなければ採用しない。彼等の採用の圈内に竄入する事が最大の問題である。製作よりも賣捌が肝要である。彼から見れば、製作に腐心して、幾多の星霜を此の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

事に費して、心身を消耗させてゐる藝術家を、そして必ずさういふ人が賣捌に拙で、少くとも自分の作に誇つて賣捌の努力を蔑んでゐるといふ事は、人生に對して怠慢であるとしか思はれないのである。

五

彼の信ずる處によれば、藝術は藝術家から內發す可きものではない。人間が團衆を形成してゐる都會には、何か物を見なくてはゐられぬといふ、物見高い要求があつてさういふ要求に促されて、公衆が劇場の門を潜るのである。その對象物の藝術的價値などは敢て問ふ處ではない。今日ワグナアのオペラに涙を流した人は、明日飛行機におなじオペラグラスをむけるのである、藝術家だけが特に尊い娛樂供給者ではないのである。世間が藝術家を尊敬して、之を神のやうに思ふのは、ほんの氣紛れに過ぎない。世間が之に大金を拂ふのは藝術家が一の藝術品を提供するために、影響として、復產物が生ずる。たとへば、オペラ唄ひが一都會で興行をすれば、金の融通がつく、若い娘に嫁の口が出來る、花屋が儲かる、馬車屋が繁昌する、事故が出來る、醫者や辯護士が爲事にありつく。それが藝術家の世に尊ばれる所以なのである。

彼はかやうにして、世界に十人とない稀有な藝術家でありながら、經師屋の小僧であつた時と同じやうに、自分を卑めると同時に自分が義務を盡してゐる人間である事を誇つて、買手に迷惑を掛けない賣手として、職業身分の高下を考へてはゐない。そうして同樣な眞面目な考へを抱いて、每日を記帳面に送つてゐたのである。

六

彼の人生觀は、直ちに彼の戀愛觀に影響してゐる。彼は戀愛も、一つの取引だと信じてゐる。敢て得をしやうとは思はない、けれども損をしてはならない。

一人の男が一人の女と戀をするといふ事は、お互に相手の中に、自分の欲してゐてゐる或貴重なものを發見して、それを享樂しやうといふに過ぎない。お互の心持の交換に過ぎない。そのためにそのたつた一部分の寶のために、人間の人生を捧げてしまふ、社會的地位を擲つてしまふといふことは、極めて愚な極である。何となれば、それは

拂過ぎた事になるからである。凡そ人は、戀愛の相手に對して無限にものを捧げられるものではない。たゞ自分のうちの僅かな部分が、相手の得になるものなのである。それだから、先方に對して、一生を捧げて呉れといふ要求をする事は不當である。强請である。女といふものを生涯自分の周圍に縛り附けて、自分を崇めさせて置かうといふ男は、卑怯者で、世間と戰つて、世間から賞讃と報酬とを得られないので、一人の女から之を得やうとするのである。

さうして人と人との間の牽引力は、戀に於ては甚だ稀薄なものである。戀愛が人に與へる快感は經驗すれば經驗する程、微少になつていく。隨つて、多く經驗するだけ、戀愛から遠くなる。戀愛などの力を信ずる者は、異性に對する經驗の乏しい者に限るので、實は殆ど無に均しい偶像を拜んでゐるのである。それだから、若し此の世に戀愛ありとすれば、戀愛のための戀愛である。生命のための戀愛はない。もし戀愛が、自分の社會上の地位を動かし、生命に危害を釀すならば、何時でも之を忘れる事が出來う可きものでなくてはならぬ。かういふ考から、彼は、自分に戀して、家をすて、子供をすて、然る後に命をすてた、ヘレネ・マロワの生生しい死骸を見すてて、契約の時間に間に合はせる可く、出發を急いだのである。

裁判

エルネスト、クロスビイ
寒村 譯

氣の違つた世界だ。
判官席の、偉い、博學な判官、
書記が嚴肅な宣誓を
證人に命じてゐる間
默つて居る傍聽人。
證人は宣誓して
そして聖書に接吻(キツス)する。
その聖書には書いてある
―爾等、誓ふ勿れ―
―爾等、裁判く勿れ―と。
それでゐて
誰も笑ひもしない―悪魔の外―。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

都會小詩

土岐哀果

金

わが生れたる淺草の家の近くに、
寺の娘にて、
いつも錢のことを『お化け、お化け』と呼びたり
　し娘のありき。

その娘は寺に嫁ぎしが、あくる年、
夫(をつと)がへいたいにとられしより、
さびしくほとけのそばにゐのこりて、
二年たちしに、
夫はかりそめの病ひにかゝり、
遂に衛戍病院にて死にたりといふ。

このわかき夫婦の運命も、まことに憐れなれど、
われの今ふと思ひいだせしは、その娘の、
まだ七つか八つなりしころ、
錢のことを『お化け、お化け』と呼びたりしそ
　のことなり。

『お化け』とは、たれのをしへし名なるらむ。
その娘、
やもめぐらしのあけくれに、今、
錢のことを『お化け、お化け』と呼びたりしをさ
　なき日の、
さるつまらなき記憶など、ありやあらずや。

疲勞

わがあたまは、このごろ、ぢきに疲れて、
何が何やらわからなくなることあり。
わが足も、やはり、わが手も、
ぢきに疲れて、
抜けてしまふかと思ふことあり、棒になつたか
　と思ふことあり。

いや、——
もつとも、朝七時におきて、晝まで書齋に入り、
晝めしを食ふより早く社(しや)にゆきて、
東京市中を、どこといふこともなく、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

人を訪ひ、ものを探ねて、
日が暮れねば家にかへらず。
夜はまたつくゑに向ひ、
讀まねば書き、書かねば讀みて、
いらいらと、あわたゞしく。………

おゝ、ぢきに疲れると思ひしが、
わがあたまよ、手よ足よ、
許せよ、かう
かんがへてみれば、ずゐぶん一日、われは働く
なるかな。
おまへたちの疲るゝは、
なかなかぢきにてもあらざるを。
されど、かうせねば、われも妻も、むすめも、
あはれ干ぼしにならねばならず。
いや――
かうせねば、わがいのちのありとしも思はれず。
げに働くといふことほどたのしきはなし、かな
しきはなし。

軍艦常盤にて

すぱすぱと茄子をきり、芋をきり、肉をきる、
その庖丁のきれあぢよ、その手つきのブキッチ
ョさよ。

デッキより脚下の圓き穴をのぞけば、その下の
浪のひかりの明るき厨房に、
當番の水兵たちは、いま、晝めしの菜を作れり
すぱすぱと、何か小聲に、いさましき軍歌らし
きをうたひつゝ、
敵の首とは似もつかぬ小さき茄子や芋をきりて
大の男がのんきさうにたべ物を作る悲しみよ。
戰闘射撃の見ぶつに、一記者として、
乘り込みしが、
朝はやくより立ちづめの、
足は疲れて棒のごとし、舘山沖の秋の風。

—九月十四日—

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

胡麻鹽頭

澁六

◎少し深く物を考へて居ると、結局は皆『自由』と『必然』との爭ひに歸着して了ふ樣な心地がする。

◎僕は唯物論者として當然に必然論者である。然し如何に必然論者であつても、眼前自己の進退取捨を决する場合には、矢張自由に行動するといふ感じがある。或點までは、やれば出來る、やられば出來ぬといふ感じがある。然し又、自由に撰擇して行動したと思ふ事でも、それが過去に屬して了へば、矢張り必然の行程であつたと思ふ。そして又現在には矢張り自由の取捨があると思ふ。そこが人間の意識といふ者の不思議な所である。

◎荒畑君の『逃避者』（雜誌『生活と藝術』所載）の中に『社會は個人の努力と否とに拘はらず、經濟的プロセスに依つて、自然に或方へ進んで行くものといふ間違つた唯物論が、非常に同志を誤まらした』。云々と書いてある。是は勿論間違つた唯物論である。只或一個人、若しくば數個人の努力ぐらゐでは、（若しそれが見當違の努力であるならば）、經濟的プロセスに大なる影響を及ぼし得るものではないと云ふ丈の事である。そこで最も大切なのは、正しい見當を立てるといふ事である。そして經濟的プロセスが段々進んで來れば、自然に其の正しい見當を立てゝ努力する人が多くなるのである。そして之を或一個人の立場から見れば、其の正しい見當に從つて努力するのが一番有効で、それだけ又自己の滿足を得られる譯である。要するに成るべく明瞭に必然を看取する事が大切である。我が自由意志をして必然に一致せしめる事が大切である。

◎又『逃避者』の中に『是がいつも、……只漫然時機々々と云つて』眼前の努力を怠る原因になると云ふ意味の事も書いてある。如何にも人間といふ奴、兎かく臆病と無性との爲に、時機々々と云つて眼前を無事安逸に過さうとする傾きのある者である。然し如何に猛烈な速行論者でも、亦必ず幾許か時機を考へない譯には行かぬ。そこが即ち必然を看取する人間の自由意志である。

◎又大杉君の『鎖工場』の中に、『俺の機械的定命の中には、大ぶいろんな未知數が入つてゐる。俺の理想の實現は、この未知數の判然しない間、必然ではない。たゞ多少の可能性を帶びた蓋然である』と書いてある。勿論我々の理想通りが必然ではない。我々は十分明瞭に必然を看取する事が出來ぬ。そこで必然と理想とがシックリ合致する譯に行かぬ。然し我々は成るべく其の二者を一致させねばならぬ。それで無ければ失望が生ずる、遣損ひが生ずる。どうせ多少の遣損ひは出來るに極つて居るが、然し成るべくそれを少くする事が利益である。そこで一方には出來るだけ精密に必然を看取し一方には出來るだけ我が理想をそれに近づけるように勉めねばならぬ。即ち成るべく『未知數』の未知量を少くせねばならぬ。そうすれば『可能性』や『蓋然』が大ぶん確かな者になる。

◎大杉君は又『俺達は奴等のやうに將來の樂觀は出來ない。そして將來に對する俺の悲觀は、現在に於ける俺の努力を勵ましめる』と書いて居る。如何にも悲觀が努力を生ずる場合も隨分ある。然し樂觀も大いに努力を生ずるものである。そして理想を先に立てゝ行けば悲觀に傾く塲合が多く、必然を先に立てゝ行けば多く樂觀を生ずる事になる。

◎以上の言は、大杉君や荒畑君が深く努力

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を重んずる信念に對して、決して異議を挾む譯ではない。否、僕自身としても、常に自己の努力の不足を顧みて、少からぬ不安を感じて居るのである。二君の論議が僕を刺激した事は決して鮮少でない。讀者諸君の中にも必ず深く二君の論議に感激した人があるだらうと思ふ。然し二君の態度、殊に大杉君の態度が、餘りに英雄的で他の『衆愚』の追隨を許さぬといふ趣きがあるので、そこは少しお手柔かに願ひたいと思ふ。猶色々云ひたい事もあるが、餘り言ひ過ぎて罰が當つても惡いから、是丈にして置く。

◎ベーベルの逝去については、日本の新聞も大ぶん色々な事を書いた。僕も少し書きたい事はあるが、此の紙上には書かれぬ。然し彼れの著書の事だけ紹介して置くに差支はあるまい。彼れの著書中、最も有名な者は『婦人論』である。此書の內容は、大体に於いて、我々仲間には既に善く知られて居る。然し一九〇九年に出た第五十版には大分新しく增補がしてある。福田德三君は先日の時事新報に、特に此書の事を紹介してゐる。世間ではマルクスの資本論の事を『勞働者の聖書』といふけれども、資本論は餘りに難解で勞働者の讀物にならぬ。それよりは此『婦人論』の方が眞に『勞働者の聖書』とするに足ると書いてある。此書は『婦人論』ではあるが、社會進化の大勢を平易に說明して、殊に將來の新社會の趣きを豫想して書いた所に讀者を牽く力がある。獨逸の原書も英譯も丸善に來て居る筈。

◎次に彼れの『自傳』は最も大なる彼れの片見である。但し此自傳は第一卷と第二卷とが出たゞけで、第三卷がまだ出て居らぬ。逝去前に第三卷の原稿が出來て居ればいゝがと案じられる。第二卷は千八百七十三四年頃迄の事が書いてある。即ち普佛戰爭の後にビスマルクが社會黨鎭壓法を出さうとする所まで書いてある。

◎ベーベルは軍曹の息子で、早く其父母に死に別れ、旋盤工の徒弟となつて隨分苦しい少年時代を送つた。それから追々勞働運動を始めて議員に撰出されてからでも猶自分の工場で働いて居た。彼れの學問は主とし、獄中の讀書の結果であつた。リープクネヒトと二人で入獄して、毎日二三時間、リープクネヒトを自分の部屋に來て貰つて英語や佛語を敎へて貰つた邊など、隨分面白く書いてある。

◎誤譯指摘が大分世間に流行してゐる。僕の『人と超人』も『英語青年』の批評に依つて多大の利益を得た。近々十分の修正を加へて更に世に問ふ積りである。それに就いておかしい事は、僕が坪內先生の誤譯を指摘した中、一個處は明かに指摘の遺損で、誤り證文まで出した次第であるが、『英語青年』も丁度それと似た事で、指摘者自身が明白な間違をして、跡で取消をした所が一個所ある。態々人の誤譯を指摘する位なら滅多に自分で其點に間違などしさうもない筈であるが、それを粗忽な僕ばかりでなく、語學專門の『英語青年』までがやつた所を見ると、反譯の六かしいといふ事がいよ〳〵深く感じられる。

◎坪內先生に對して敢て失敬な事を云ふ譯ではないが、先生が是まで一般に信じられて居た程な英語の達人でない事は、既に世に明かになつたと思ふ。又、是こそは反譯界のオーソリチーとして人も許し我も許した鷗外先生すらも、誰やらの誤譯指摘に對して、幾個處か明白に其の誤譯を承認して居ると聞いた。是は何も兩先生の眞價を傷けるものではなく、只日本人が西洋文を學び、及び之を譯する事の、如何に困難なるかを示すものである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

郊外生活

安成二郎

×
借り間より、いさゝかひろし、
　あちこちと、
座敷をあるき、腹が空りたり。
×
ソフアがほし、兒には乳母車を、——
　さて女には
男と兒との滿足の笑顏を。
×
庭を接する、井上十吉の、
　女中の、米山節も、
郊外生活。
×
朝飯の出來るあひだを、
兒を抱いて、
　戶山の原を一と周りする。
×
兒を抱いて、しやがんでゐれば、
　犬が來て、
兒の鼻を舐る、秋の朝かな。
×
近代の貧乏の、脚の早さよ！
×
悲しみ新たなり——
　乃木大將の一週忌。
貧乏ものに、また秋が來る。
×
『また生れる？
また歌を作るンだらうなア』
原田讓二のエピグラム。
×
子供をごつさり生んで、
友人が皆、貧乏になれ、
公平に。
×
洛陽女兒、
　愍吾憔悴曰。
『伊昔紅顏美少年』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

いやな顔

德永保之助

パチン、『ハイ、よろしう………』
一瞬間、
ふと俺は俺の顔を思ひ出した、
久しく忘れてゐた、
俺の、夜更しをする生活の、蒼い、厭な顔を！
モウ取りかへしのつかぬ事、
何とかゴマかして、
金をやらずにほつとけ！

ノッポの煙突よ（牢獄追懷）

さて今日もまた、
あの煙突と話さうか。

高い赤煉瓦の塀の向うに、
街の中につッ立つて、
太い黒けむりを吐く一本の煙突よ、
お前の下に、煤煙の中で、
眞黒に働いてゐる職工らにさう云つてくれ！

都會に住むお前らの生活の戰ひのはげしさ！
俺はよくそれを知つてゐる、
しかもそれに打克つお前らは實につよい、
俺は心から尊敬する、祝福する、
お前らを。
と只これ丈け云つてくれ！
お前のまつ赤に燬けた腹の底から、
でかい聲を出して、
俺の親愛なる友、
ノッポの煙突よ。

しかし、いつまでか、
俺と云ふものは此の監獄につながれて、
鐵の窓から、
職工らの焚くけむりを、
けむの消えてゆく街の空を、
毎日、ぼんやりと眺めてばかり。———

世の中に、
俺はおくれはせぬだらうか。
ノッポの煙突よ。

ある日

筒井吉久

初秋の雨が降つては歇み、やんでは降る、定めの無い空合の日であつた。

午後四時頃――店はかなりたてこんでゐた。午後八時の下の關行列車に積み込むべき荷物は、雨が降るので車へ積み込むこともならず、所狹い迄に置れてあつた。皆なは忙しく仕事に熱中してゐた。

と、佩劍の音ががちやりとして、外套を纏ふた白衣の警官が二人、にゆつと店先に突立つた。皆なは一齊に仕事の手を休めて、この闖入者のやうな巡査を見詰めた。

『主人か支配人か、責任のある者に……。』　巡査の聲は嚴そかであつた。

皆なの頭には、發賣禁止と言ふ事が、電光のやうにさつと一齊に閃めき渡つた。

中の帳場にゐるＹ氏に眼配せすると、Ｙ氏は朝鮮鬚を撫でながら、例の品のない歩き方をして出て來た。

『△△は、あなたの方へは何部來ました。』　三十五六の、柔和な相をした、發賣禁止と云ふ時には、いつも定つてやつて來る、顏なじみの巡査が云つた。

『さうでございます、まだ全部は來てをりませんが……。』

係が違ふので、Ｙ氏は答に窮して背後の帳場を顧ると、

『四百部來ました。』　と、巡査に言ふとも、Ｙ氏に答へるともつかずに、Ａ氏が云つた。座りもせず、しやがみもしないで、そこに積み重ねてある雜誌に片手を突いて、下から巡査の顎を覗いてゐるＹ氏は、

『四百部余り來ましたさうです。』　と口傳へに云つた。

『それで、幾册殘つてをる。』　來るなり『主人か支配人』と云つた、鬚を生やした、高慢さうな巡査が、『さうです？』が癪に障つたものか、語勢あらく言ひ放した。

『一册もございませんのです。來ると直ぐ、皆な市内や地方の得意へ、直ぐにやるものですから……。』

巡査の顏には、疑の表情がアリアリとあらはれた。

『一册や二册、無いことはあるまい？』

『いゝえ、もう一册もございません。只今も申しました通り、全部の三分の一もまだ品物が渡らないのでございまして。……先刻も後をどうするかつて、×××に催促したやうな次第でございまして……。』　Ｙ氏は、只だ頭さへ下げて居れば無事だといふ風に、何處までもばか叮嚀である。

『さうか、それぢや、その帳面を見せてくれ……。』

その容子を見てゐた皆は、巡査の態度の余りに威嚇的、高壓的なのと、それにまた、Ｙ氏が余りびく／＼し過ぎて、大人氣ない應對振りなのが、癪に障つて堪らないといふ顏をしてゐた。

『帳面はこれです』。　鬚がのびて、恐ろしく人相の惡ろくなつてゐる彼が、語氣荒らかに進み出た。

『これはどういふ風にして、出してあるんですか？。』

『この鉛筆で消してあるのが、出た部數で、右側の文字が、得

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

意の名なんです。』

帳面は店の者でなければ、見た處で到底も解りつこは無い。只だ部數と、暗號得意の名が書いてあるばかりで、何處のなんと言ふ書店へ遣つたものか、さつぱり解らないものである。で、彼は巡査が帳面の事に就てなんとか云つたら、やりかへしてやる積で企んでゐたが、巡査もそれについては何事も言はなかつた。

『この數を讀んでくれませんか。』　幾らか巡査の語氣もやさしくなつたので、彼もおとなしく讀んでやつた。巡査は手帳を出して、五、七、二十、三十と、彼が讀む數を一々控へる。控へて了ふと、今度は暗算で寄せ始めたが、どうしても巧く出來ない。彼は見るに見兼ねて、

『算盤を貸してあげませうか。』

『えゝ、どうぞ……。』

一人の巡査は、こんな事には一切頓着なく、そこらに散ばつてゐる雜誌を披いて見てゐた。やがて前の巡査は、

『三百九十六になりますねえ。』　と、やつと答を出した。

『えゝさうです。殘りの十四部は店賣りですから。』　彼はきつぱり答へた。今まで默つて二人の會話を聞いてゐたＹ氏は、何とか云はねば惡るいとでも思つたか、すぐその尾に付いて、

『卸し賣ばかりしてゐましても、やつぱり店へも買ひに來る人がありまして……。』　と、言ひ譯でもするやうにオドオド云つた。巡査はやがて、『失敬』と云つて歸つて行つた。

『どうしたんだらう、△△が發賣禁止になるなんて……。』

『發賣禁止に巡査が二人來るのは、珍らしいねえ。』

店はしばらく、その噂で持ち切りだつた。

『小說だよ、叛逆つて……。いつかの大逆事件を書いたんだよ。風俗壞亂でなくて、治安妨害か、秩序紊亂かだから、それで二人來たんだらうが、それにしても余まり物々しいねえ。』　昨夜、△△が店へ運ばれると、早速讀んで知つてゐる彼は、斯う皆なに云つた。

『誰が書いたんだね。』

『×××といふ、辯護士の……。』

『あゝ、あの○○をやつてる……。』

『あすこの娘つたら、ほんとにお轉婆だよ。いつ行つて見ても、書生ときやつきやつと、ふざけてるんだもの。』　いつも雜誌を取りに行つて知つてゐる、誰かゞかう云つた。

『しかし、實に愉快だ。當局の愕いた顔が見たかつたなあ。奴さん、愕きやがつて、慌てゝ發賣禁止にしやがつたんだらうが……。』　最近の燒打事件の折にも、まつ先に店を飛び出して行つて、彼方此方駈けまはつたり、新聞の時局談を受賣りしては、始終悲憤してゐるＫーが、さもさも痛快さうに云つた。

『それよりも、×××主の態度が何よりか觀物だつたらうぜ。發賣禁止と聞いて、青筋立てて編輯部へ飛び込んだらうからなア。何しろ、發賣禁止をもつて、最大の汚辱と心得てる先生の事だからネ。』

が皆な、只こんな無駄話をするばかりで、發賣禁止の是非に就て議論しやうとする者は、一人も無かつた。

『△△、無いかね。』　日頃は自分の好きな圍碁の雜誌を見る以外に、讀書といつては餘りしないが、その代りに發賣禁止と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

云へば誰よりも眞先に讀み耽るS氏が、低聲にかう云ひ乍ら出て來た。

『店のは無いが、僕のがあるから貸そうか。』

それから、計算部の者や、庶務部の者が、

『△△、無いかね。△△、無いかね。』　と云つて、たつた一册の雜誌を、店中で引ぱり凧にした。

彼は、昨夜讀んだ『叛逆』に就て考へて見た。

一時、世間を騷がした大逆事件に、彼は妙な因縁をもつてゐた。それは、彼は主魁と目せられて居た――氏と同鄕の上、生前知己の間柄であつた爲め、その頃は、今にも思ひもかけぬ嫌疑がかゝつて、自分も引致されて、先の知れない永い月日を、暗い未決監に送つた揚句、ヒヨツと言葉の行違ひか何かで、この恐ろしい事件の連累にでもされはしまいか、と不安な、慌たゞしい、そして苦しい氣分で、その日その日を送つてゐた。が、それほど心を痛めたり、苦んだりした此の事件に就て、一体何を知つてゐるかと云へば、彼はその――氏と同鄕の關係から、多少、知己であつたといふ外、何の知る處も無かつた。後から考へると滑稽な位だつたが、それほど、當時官憲の羅織の酷しさは、世間の人々に大きなセンセーションを起させたのであつた。それがいまゆくりなくも『叛逆』の一篇によつて、事件の縱斷面を見せつけられた彼は、のやうに、彼等の死を憫れまずにはゐられなかつた今更。

雨はまたしよぼ〳〵と、すゝり泣くやうに降り出した。

『內部』と『モンナ・ヴンナ』

綠葉

藝術座の第一回上演はたしかに失敗であつた。この座に近い關係と、特別の同情とを持つてゐる僕はそれをひどく殘念に思ふ。併しメーテルリンクは矢張僕の最も好きな作家の一人である。殊に『タンタヂールの死』と『闖入者』と、この『內部』とは特に秀れてゐる作だと思ふ。第一義道德の衝突と矛盾だとか、犧牲の精神だとか、新らしい愛の覺醒だとかいふ事は、少くも『モンナ・ヴンナ』のやうな取扱ひ方では僕には莫迦々々しい事であつて、從つて『モンナ・ヴンナ』は甚だつまらないものであるが、その他の作は大抵僕の心持に接觸する處が多い。『タンタヂールの死』でも、『內部』でも、メーテルリンクは闇の中を逃げて行く黑い影を摑もうとしてゐる、その摑み方には未だ足りないところもあるかも知れないが、少くも彼は死の國の扉をば叩いてゐる。『內部』に出てくる老人が室內の人々を見て、『みんな危險といふものゝ手の屆かない處にゐるやうな顏をしてゐる』といふ意味の事をいふ、この言葉などは非常に暗示に富んでゐると思ふ。僕はいろんな意味に於て、メーテルリンクはよき了解を持つてゐる作家だと思ふ。かういふ人の作を演じて、藝術座の人々は何故に失敗したらうか。

一体劇といふものは餘りに時間と空間とを限り過ぎる。背景だとか、電燈だとか、登場者だとか、いろんな物の影が動き過ぎる。これ等のものが全くよく調和した時、初めて僅に見物の頭にイルーヂョンを描き得るが、なほ脚本を讀むやうな自由な想像をば與へない。(少くも『內部』の如き作に於ては)一体メーテルリンクのやうな思想を描くには、必ずしも脚本の形をとる必要はあるまいと思ふ。劇の形を最も有功に用ひた者は何と云つてもイプセンが第一である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

暴風雨

Pataud et Pouget

荒畑寒村

一千九百——年、春先の日曜の朝だつた。
大工職の同盟罷工者數千人は、巴里サン●ポウルの乘馬學校に集合した。一室に集合し、永い間の同盟罷工によつて既に隨分昂奮し、その上演說に鼓舞せられ、そしてオガ屑や、腐つた塵埃を踏み付けてイライラしてゐる群衆は、憤怒し、喧騷に赴くばかりだつた。

暴風雨が空中に胚まれて往くやうだつた。大きくなつて往く激怒は、遠雷のうなりのやうだつた。そして、今にも嵐が破れて、火になるのかと思はれた。恰ごまる二週間といふもの、勞働は休止せられ、組合全体は同盟罷業に加はつた。勞働者は頑强に反抗して、必ず勝たんことを期した。然し政府の助力を賴みにせる資本家は、斷乎として、僅かの讓歩すらも肯んじなかつた。

やがて集會は終つたが、解散せんとする群衆は、例によつて、巡査の爲めに妨害せられた。乘馬學校の在る處は、容易く塞がれ得る、極めて狹い街路なので、巡査隊をして一層密集するを得せしめた。そして、要愼し過ぎた巡査等は、水の滴の垂れるやうに、僅かに一人づゝしか通さないので、會堂は却々空にならず、そしてその遲緩さは、徒らに群衆の神經を焦立たした。それは遂に、重過ぎる壓力の下に置かれた原素のやうに、俄然として膨脹し、そして猛烈な突進で、巡査の築塞を破つて了つた。さすが優勢の巡査隊も、此の勢ひには敵し兼ねて遂ひに退けられ、群衆はやゝ早く四散し得るやうになつた。

巡査隊の指揮官は、此の光景に嚇怒して、直ちに部下を再集した。そして、騷然としてサント、アントアヌ街を通つて流れ往く、人間の波浪の後方を突然襲擊させた。罷工者の群衆は、ふり返つて襲擊者に當面した。そして時の間に、喧嘩は小戰鬪に變じた。舖石道に置かれた、カフェの前の食卓、椅子、板、轉覆した鐵道馬車……築塞が作られる。勞働者の反抗は痛烈だつた。彼等は狂氣の如くに戰つた!。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

サント、アントァヌ街に、かゝる椿事が起つてゐる間に、罷工者の一隊は、リボリ街から本並樹道の方へ、隋圓形の方向をとつて進んで行つた。で、散在してゐる少數の巡査や、倉庫を守護したり、其處此處に駐屯してゐる軍隊に、元より之を阻む力は無かつたので、何の苦も無く到達した。

並樹道はいつも通り、散歩に來た人や、カフェの外側に陣取つてゐる閑人で、一ぱいだつた。勞働者の示威運動は、この群衆の間に、驚駭と、騷擾と、恐怖とを惹起した。そして、その中の或る者などは、勞働者と一緒になつて進んだ。野次馬や血氣の青年で簇立つた集團は、急流のやうにマドレエヌの方へ落下して往つた。此の報道を耳にした警視總監は、直ちに命を下して、この示威運動者に對し、巡査の一隊を差し向けた。彼等は急速に到着する爲めに、地下鐵道によつてオペラ廣場に出でた。此の巡査隊は、此處の四ッ角や、附近の工場を警護してゐる軍隊と合體して、罷工者と會戰しやうとするのであつた。

衝突はボードビル附近に起つた。巡査隊は直ちに拔劍して罷工者に突貫した。是に憤怒した罷工者は一歩も退かず、手に當る物を武器として防ぎ戰つた。然し此の不公平な戰ひが始まると直ぐ、銃聲は響き出した。その果して罷工者が先だつたか、或は巡査が先だつたか、それは解らないが、兎に角、罷工者の拳銃よりは巡査の短銃の方が、一層多くの犧牲を作つたのは事實である。それでも、罷工者はその地點を死守し、戰ひは益々その勇氣を増すのみだつた。彼等の武備は手薄だつたが、然も群衆は、その憤恨と激怒との爲に、勢ひ頗ぶる猛烈を極めた。が、巡査隊の指揮官も、また退却を欲しなかつたので、遂に援を軍隊に請ふた。

戰爭の光景と、亂打されてゐたのとで、興奮し、殺氣立つた軍隊は、自働機械のやうに服從した。そして命令一下するや、彼等は直ちに發砲した。群衆は算を亂して逃走した。それはまるで、大鎌で彼等を薙ぎ切つたやうだつた。悲鳴呻吟の聲は、憤怒呪咀の叫びと相和した。勞働者側には、多くの負傷者の外、死者をも出すに到つて、生々しい血は舗石道に流れ、日に照りつけられた骸は、埃りに塗れて横はつた。折柄急派された騎兵隊は、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

近傍の街路から、青葉茂れる並樹道目がけて突貫し、遂に示威運動を衝き崩した。群衆は、バラバラに逐ひ散されても解散せず、數團は再び新らしく團結して、更に郊外に向つて進み出し、それから、今夜集會が催ふされる公會堂に赴むいた。道々、彼等は火の如き怒聲に、罷工者虐殺の蠻行を觸れ歩いた。

猛烈な一齊射擊の後、暫らくは痛ましい寂寞が續いた。罷工者は負傷者を收容して、附近の藥局に運び去り、また、同志が踏み止まつて死守した死者の遺骸は、自働車に移し乘せられて、悲壯な行列の中に大工業同盟の事務所に運ばれた。そして手早く埋葬室に替られた室に、此の不幸な人々の骸は横へられた。社會的戰爭の前哨戰ともいふべき當日の悲劇は、決して雲の無い空に起つた霹靂ではなかつた。大氣はどうから怒りと怨みとに重く、いかにも住みにくい、厭な世の中だつた。此の焦立たしさ、此の氣せはしさは、やがて人々に、何でもない出來事が、重大な結果を產むに違ひないと想はせた。

長くして酷しい冬は、その不安の原因を強めた。勞働者の家は皆な惱み苦しんでゐた。それに嚴しい寒さに加へて、供給不足でも無いのに、單に獨占事業の爲めに物價は恐ろしく高かつた。かうして春の初めから、產業的動搖は增して往つた。それは恰ど勞働者が、苦しい冬が、敵手を弱めなかつた事を自ら確かめんとして、その筋を伸し、その力を試みる爲めに、まだ薄寒くはあつたが、微笑するやうな日光に照されて、活動し出したやうであつた。且つ勞働者と資本家との間の抗爭は、殆んど極度まで緊張するに至つた。そしてどちらも、時々休戰して和解はするが、それは決して永續きのしない、不斷の戰爭狀態に在るのだといふ事を強く意識してゐた。

戰の爲には、どちらも強く團結してゐた。勞働總同盟の內で結合してゐる勞働者の組合、及びその職業同盟に對抗して、資本家はトラストを作れる產業の多くの部門、或は少くとも、同盟罷工を防衞すべき聯合を有してゐる。それだから、同盟罷業がその安全を脅やかすと同時に、資本家は工場締出の手段を執り、その職業に從ふ勞働者は誰彼無しに、殘らず工場或は製造所から追ひ出して

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

了つた。資本家の此の防衛手段は、いつも勞働者の間に痛慘な反響を生じ、遠く廣くその悲慘を撒き散し、そして暫らくはその組合を壞崩して了つた。然しこういふ危機は、極めて短期な部分的なものだつたので、勞働者が自己の仲間内に起した苦難は、限られた範圍に止まつてゐた。勞働階級全体から云へば、その相互扶助の意義を通して、初めてこういふ手段の充分な力を感じたに過ぎなかつたので、勞働者はその峻嚴な要求を弱めないのみか、却つて益々强調した。

資本家の努力は、それ故、期待せる處と正反對の結果を生じた。彼等は勞働者の熱情を減殺せぬ許りで無く、平民階級の間の最も平和な、最も怠惰な、最も逡巡せる輩をさへも、勞働組合の内に投げ入れた。その内に、此の破壞運動の成長を阻碍すべき企ては、却つて事毎に喰ひ違ふといふやうな、革命的勃興の時代に必ず起る事が、こゝにもまた起つた。此の場合、資本家が壓抑手段の最も見易い結果は、彼等と勞働者との間の裂隙を、一層深く且つ廣くする事だつた。こうなつては、もう平靜な時期とては滅多に無く、危機が一の組合でやつと緩むと、他の組合では毒々しい程强くなる。同盟罷業は同盟罷業に續き、工場締出は非買同盟によつて酬ひられ、サボテージは恐るべき强さで用ひられた。そして遂に、製造業者や商人等は、その特權ある位置をも羨やむに足らずとなし、擁護される事を危ぶみ出しさへした。

政治的に觀ても、その地平線は經濟上に劣らず、雲行あやしき空あひであつた。共和政府はその初めに有せる魅力を失つてゐた。それは一切の希望に背き、帝政時代に夢想された社會的政体、新らしい世界の輪廓とはならずして、社會の搆造を必然に前のやうに、政府をして權力階級、紳士閥の利益のみを擁護させるやうにした。種々なる政黨政派は代る代る内閣を組織したが、然も人民は是に依て、些の改善を享けず、何の進歩をも見なかつた。保守黨は改良を標榜せる敵と合同し、その社會主義者たる事を誇りさへもした。然し、曾て正義眞理等の大主義の爲に戰つた社會主義者も、一度政權を穫たが最後、些しも他と異らなかつた。

こういふものが、人民の幻滅を作つた。そして

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

最も偏見に富んだ者にさへも、議會政策の根底には、人情を破壞し、良心を腐敗する廢頽の芽があるといふ事を、突如として知らせたのである。その上に、政府の惡業は、昔よりもまだ露骨に見せ付けられた。欺瞞！官憲庇護の下の商業！公金の費消！奸計！無道！斷間なき醜聞！。そして政府の何省何局などいふやうなものは、不正直な商賣を營む役所に過ぎなかつた。

　この國家組織の必然の結果たる、凡て此の混濁、凡て此の醜態の流れは、前の社會よりも更に黑く、更に腐つてゐる。然し乍ら、批判力の發達し、視力の明らかとなつた民衆は、曩には無關心に打ち過ぎてゐた事に、今はもう堪へ難き嫌惡を感じた。此の嫌厭と憎惡とは、彼等に眞實を直視させた。彼等は過去をふり返らなかつた、舊式の政府に復歸する事が、鐚一文にもならないとは、彼等のよく知れる處だつたから。よし彼等が懷疑に浸み、そして療法の解らぬ疾病だと觀念して、議會政治に服從してゐるにもせよ、彼等は尠くとも、政治が根治的の療法で無い事だけは知つてゐた。民衆の間にだんだん地歩を占めて來た此の理性の發達、此の意識の成長は、その路を照すほど充分には輝やかなかつた。彼等は全体としての新生活が、議會政治の外だといふ事を先見し、そして勞働組合が設ける經濟的同盟に、その幼芽の閃光を瞥見したのである。彼等は壞頽しかけてゐる軍隊、政府、及び資本家の勢力を排除する社會力が、自己內に發達しつゝある事を感じた。が、是は單に不明な思慕に過ぎないので、是に判然した形を賦與するには、勢ひ革命的精神の助長が必要であつた。

　次第に力を增し、勢を加へ、且つ不斷に自覺の發達してゐる勞働階級に對しては、政府は時には親しい、また時には敵視する態度を持つた。然し狂的な抑壓も、橫暴な迫害も、溫柔な腐敗も、或は利益の施しも、遂に彼を弱め得なかつた。民衆の團体は、何物を以てするも彼等を壓倒出來なかつた程、强烈な意志に支へられ、深く叛逆の精神を吸込んでゐた。彼等の裏には、彼等を前方に驀進せしめて、一切の反動的計劃を蹴破し、最も巧妙だと思はるゝ抑壓的手段をさへも、裏をかゝせる力があつた。一方ではまた、民衆の悲慘、その謬見、その過誤すらも、彼等のコーズの成功を助

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

けたのである。前にも屢々見られた此の現象は、種々な出來事が生ずるに隨つて、更に大に顯はれんとしてゐた。

民衆の希望の中心たる勞働組合の組織は、政府が或は正面攻擊により、或は離間中傷策によつて打ち壞さんとした爲めに、不斷の危險に襲はれてゐたが、然しどれも無效であつた。政府が愛想よく、和解的になり、そして勞働者を懷柔せんと試みた時、彼等はその係蹄にかゝるやうな愚は學ばず、却つてその機會をば自己の行動を強調するに利用した。飜つて、政府がその策略を變へて平生の暴虐な態度に復り、些細な爭ひにも軍隊を出動させ、後から後からと同盟罷工を鎭壓し、そして悲慘な出來事の數を增して往く時にも、彼等は敢て敗られはしなかつた。

こうしてゐる間に、勞働階級は益々好戰的となつた。彼等は市街を占領した、そして抵抗の戰術に熟達した。彼等はどうすれば、巡査隊の前に地點を守り得べきか、驀進し來る軍隊を向ふに廻してどう對抗すべきか、それを知るやうになつた。脅されたりすかされたりして、彼等は遂には深い侮蔑の眼で政府を見下すやうになり、それに對つては憎惡の外何ものも感ぜぬやうになつて、日に日に反抗的となつて往つた。サン、ポウルの乘馬學校に於ける集會後、その歸途を遮斷された結果が、あゝも急劇に爭鬪一揆と變つたのは、蓋し是が爲めである。

滿二週間といふもの、大工業者の同盟罷工は巴里を沸騰させ續けた。それは或る工場で、勞働者との爭ひから始まつた。他の種々な部類の同志等は、援助の爲に直ちに道具を抛下し、そして此の殘害された僅かの勞働者の爲に、すぐ全地方の同盟罷工を見た。資本家はその強力な聯合を賴みにして、鬪爭の區域を限らうとはせず、却つて火に油を注ぐやうな手段をとつた。で同盟罷工は一地方から他地方に蔓り、遂にその職業全体に及んだ。

同時に巴里にも地方にも、民衆の不安を增し、民心を昂奮させる、他の同盟罷工が一齊に勃發した。此の爭鬪に加はれる勞働者は、巴里だけでも約十萬人はあつた。地方の騷擾は、更に廣く蔓延

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

したが、然も決してその爲に弱まりはしなかつた。そして、最も目立つた點は、不安が產業的中心にのみ限られないで、農業地方も亦その數に泄れない事である。何處でゞも、極めて些細な事から、資本家と勞働者の間の軋轢と衝突は、激烈な抗爭、不斷に增せる辛辣を示す同盟罷工に增長した。

資本家と政府に對する憎惡が、くすぶつたり燃え上つたりしてゐる此の重い大氣の中を、サン、ポウルの乘馬學校附近に於ける衝突や、その後で、本並樹道の鋪石道を、勞働者の鮮血で彩つたニュースが、電光の如き速さで擴まつた。

初めは誰も呆然とし、慄然とした。次で、皆な拳をヒッ捉んだ。憤怒が爆發した。民衆は苦惱して、悲憤して、痛ましく激昂してゐた。そしてもう、激情はその絕頂に達した。

暴風雨は破裂したのだ。

此の虐殺は——從來の多くのものよりは、殘虐ではないが——、革命的狀勢を早め、且つ造り上げたのであつた。（未　完）

大久保より

榮

お上の御深切のお蔭で大ぶ地方の讀者が減りさうなので、せめては市內で其の埋合せをつけなければならぬと云ふ所から、此頃雜誌の見本配付を始めた。いつかも寒村と二人で、百五十部ばかりづゝ引抱へて、本鄉の通りをぶらついて步いた。

本月は藝術座講演會を利用して、十三日の夕方、更に安成二郎を援兵に乞ひ、更に講演會の傍聽に來た賣文社の佐藤悟をも同勢に加へて、靑年會館の門前で四百部あまり、配り散らした。

『此の號は持つてゐるんですが何月號はありますまいか』などゝ、當前な、然し虫のいゝ事を云ふ人もある。『たゞ戴いてもいゝのですか』などゝ、いやにしほらしい事を云ふ人もある。その中でたつた一人、しかも女で、僕等のさし出す雜誌をふり向いて見もしないで行つた人があつた。

寒村も僕も其の女の顏は知つてゐるし、とてもやつたつて駄目だと思つたものだから、始めから知らぬ顏をしてゐたのだが、二郎と佐藤とは、そのフイと橫を向いて肩で風を切つて行くおすましさ加減に、アッケに取られてゐた。

所が暫くすると、其の女が門內から戾つて來て、『あなた方は其處でなにをしてゐらつしやるの』と仰る。餘計な事をぬかしやがる尼だなあとは思つたが、寒村がおとなしく『エヽ、近代思想の見本をくばつてゐるんです』と云ふ、すると『ぢや、藝術座の人ぢやないの。』と顎をしやくる。僕はムッとして了つた。そして平常の吃りにも似合はず、尤も惡口を云ふ時にはいつもさうなのだが、即座に口を衝いて『さうぢやないのよう』と妙に尻上りに怒鳴つた。皆んなはワアと吹き出す。女はプップと脹れて門內へ引返へす。

其の女かい。それは僕がふだんから大すきな、よく亭主の事を『處決しなければならぬ、處決しなければならぬ』と云つてゐる、あの田村俊子さんさ。

六雜誌管見

寒

■青鞜　附錄として、エンマ、ゴールドマン女史の、『婦人解放の悲劇』の飜譯がある。僕はまづ第一に、いつもエレン、ケイ一點張で無く、稀には自己完成よりも、社會改革を急ぐ、此の無政府主義者の論文を譯載した、青鞜社同人の勞を謝したいと思ふ。些しばかりの字句の間違ひや、文章の冗長で、原文の强い力を弱めてゐる事なぞは、此の場合さしたることでは無いのである。然し乍ら、青鞜社同人がゴールドマンの此の論文を藉りて、直ちに自家戰鬪の武器とするんだつたら、それは西諺に謂ゆる『惡魔も時に聖書を引く』事になる。若しまた、世間にはこんな議論もあるといふ、參考までにわざわざ譯したといふだけなら、青鞜社同人諸君はゴールドマンの此の議論に對して、どういふ態度をとられるのであらうか。高等敎育と職業の自由と、選擧權の獲得と、凡て是らの謂ゆる『婦人解放』が、婦人から人情の自由を奪ひ、愛の權利を奪ひ、全く悲劇に終れる事、及び終るべき事は、ゴールドマン既に之を說き、賢明なる諸君の熟知し、而して僕等の同ずる處である。問題は然し乍ら、此の『偉なる自由に向ふ大道に數世紀の間橫はつてゐる服從と奴隸の拂拭せられなければならぬ』婦人解放が、いかにして成就さるべきか、に在る。そしてゴールドマンは、此の問題が他の一切の重大な社會問題と等しく、無政府主義に於ける社會革命を外にして解決の途なしとせる事、また諸君の夙に知らるゝ處と思ふ。故に、旣に『兩性關係の眞の意義を征服者、被征服者といふが如き關係を許さない』以上、『凡ての壓服せられたる階級はそれ自らの努力によつてのみ眞の自由を得てゐる』以上、諸君はいかにして此の問題を解決せんとするのである乎。或る點迄はゴールドマンと同じ意見を懷抱するがその手段方法に至つては、社會革命によらず無政府主義によらず、所謂自己完成と、藝術的遊戲とによるのである乎。僕は諸君が、『解放は先づ女子の心靈中に初まる』と云ひ、『自己心內の新生を創始する事が必要である』と云ふ如き、やゝ抽象的な語を以てゴールドマンを米國の平塚雷鳥輩となさゞらん事を望む。『有ゆる偏見と傳說と習俗の羈絆を切斷』するといふ事は、即ち社會的解放以外に自己完成ありといふが如き、禪學的迷信から離脫するの謂なる事を知られん事を望む。

■生活と藝術　土岐哀果の編輯する處、雄々しい意氣と抱負をもつて新たに生れた文藝雜誌である。忌憚なく僕をして云はしむれば、或は是は創刊號の故だからかも知れないが、內容を一貫せる統一の無いのが瑕であると思ふ。謂ふ所の統一とは、皆なが皆な、同じやうな事の百曼陀羅を並べるといふのでは無い。錯雜した內容を一貫して、そこに此の雜誌の類型的で無い、特殊なる個性の發現があらねばならぬといふのである。それから又、これは追々そうなる事とは思ふが、哀果主筆の活動を、もう些し誌上に拜見したいものである。

■冒險世界　阿武天風といふ、名前からしてエラそうな人が、『近代思想』は虛無主義者、暗殺主義者、社會主義者の寄り集りだから、近い中に爆烈彈で鏖殺しにしてやると意張つてゐる。コハヤノ、コハヤノ、オゝコハヤ。然しアブテン先生、某氏の送別會でその所謂暗殺主義者の處へ、わざわざ盃頂戴に出向いた何とやらいふ人も、ソンジョ其處等にあるそうですぜ。マアマアな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

んな野暮な事はやめにして、どうだい、冒険世界の廣告の一頁も出さない。

■世界雑誌　第一巻第七號に、『シンヂカリズム』と題する評論が載つてゐる。『京都法學會雑誌』や、本誌などが、センヂカリスムに關する獨立の評論を揚げて、その研究論議に資してゐる勞は、大に多とすべきものがある。本誌の、『シンヂカリズム』論はまだ序論ともいふべきものであるが、然も僕は此の序論に於て、佛國に於ける勞働階級の日常爭鬪の過程の進化が、遂に今日のセンヂカリスムと稱する形態をとるに至つた事實を、歴史的にやゝ詳しく述べて貰ひたかつた。ソレルがセンヂカリスムに哲學的基礎を與へやうと、與へまいと、更にその理論がベルグソンの哲學と一致しやが、しまいが、そんな事はセンヂカリスムの消長成否には關しない。センヂカリスムは純粋の勞働運動であり、またその團結内に將來の新社會の芽が、徐々に、そして旺盛に發達してゐる處に、その必ず實現せられ得べき革命的强力が存するのである。

■新小説　兒玉花外の『淺草の女』は、やれ十二階下にクレオパトラのやうな淫賣が居たの、仲店の詩のやうな半襟美觀だのと、相變らずの熱情的ヨタを奏つてゐるのだから手が附けられない。頽廢した生活を送つてゐる自己内心の省察でも無ければ、社會のドン底に陷つてゐる女達の心理の描寫でも無く、またこういふ一團の人間の生活を通じて、社會組織の缺陷を批評するのでも無い。女を見、活動寫眞の看板を見、料理店の酒を飲み、只だ徒らに誇張した語で、空虚な感慨を泄らしてゐるに過ぎぬ。こんな物は新小説一册書き潰したつて小説じやない、只だ淺草の淫賣宿の細見だ。

■太陽　平出修の『叛逆』には、先の『計劃』と同じ慊らぬ節が多い。事實を在の儘に投げ出して、その根底に横はる嚴粛な問題に觸れんとする態度でなく、都合のいゝやうに拵へ上げやうとする點がやはり見出される。作者が叛逆の原因を、單に强迫觀念に歸し終つて、政治的バイオレンスの心理を精細に考察描寫しないのも、三村保太郎一人の感情思想を描いて、廿余人の逆徒の心理を之に代表させんとしたらしく見ゆるのも、また甚だ慊たらず思はれる。然し、滔々たる耽美派の小説の中に、かういふ嚴粛な問題を取扱ふ作物の現はれた事は、尠からず愉快に感ぜらるゝ處である。

■寄贈雑誌■

馬上大學　實業之世界
內外教育評論　婦人評論
とりで　護教
帝國文學　凍野
モザイク　新潮
新佛教　人生と表現
東京魁新聞　白樺
新東京　支那と日本
野の聲　ニコ〳〵
村落通信　青鞜
鑛業及鑛夫　獨立評論
第三文明と劇場　銀磬
圖書評論　ダイヤモンド
現代詩文・ナショナル
創造(劇と詩改題)　新文林
砂丘　新公論
世界雑誌　河鹿

■九月號目次■

野獸(感想)……………榮
鎖工場(評論)…………大杉榮
木村鷹太郎氏の心理(評論)……安成貞雄
稚い芽(小説)…………佐藤綠葉
ひなた水(詩)…………德永保之助
虫けらの心(詩)………生方敏郎
或る男の影(小説)……荒畑寒村
ある男と女郎との對話……伊庭孝
人と超人(脚本)………堺利彦
八月の雑誌(批評)……寒

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

消息

■近代劇協會を退いた伊庭孝は、別に新しく一座を組織して、十月十六日から七日間有樂座で第一回興行をする。藝題はエデキント作森林太郎譯『出發前半時間』とショウ作伊庭孝譯『チョコレート兵隊』。此の後者は、嘗つて堺が本誌に其の梗概を書いた『武裝と人』と同じものだ。

■去年の大赦で出獄した不敬事件の橋浦時雄は、暫く故郷にゐたが、八月末上京して賣文社に入つた。これで賣文社は、佐藤悟と相坂悟と丁度不敬漢が三人になつた譯だ。

■安成二郎は社のすぐ近所の、やはり大久保百人町にひつこして來た。

■しばらく休んでゐた茶話會が、九月廿日の晩、神田の豊生軒で催された。集まるもの廿名ばかり。片山、堺、高畠、小原などのベーベル談で大いに賑ふ。

■和氣律次郎譯『オスカアワイルド論』は近く春陽堂から出る筈。其の一部は嘗つて本誌に連載せられた事がある。

■前號の『大久保より』にあつた近代思想社の發展は、まだ未定。

■本社取次書籍■

本社に於て次の新著を推奬し、取次販賣をする。御注文は成るべく振替貯金によられたい。價は定價通り、郵税は當方もち。

▲ニイチエの格及哲學　メエビウス著　三浦白水譯　金六十錢

▲密蜂の生活　メエテルリンク著　岡本清逸譯　金一圓卅錢

▲罪と罰　内田魯庵譯　金一圓四十錢

▲生命論　永井潜著　金二圓五十錢

▲新道徳論　浮田和民著　金一圓

▲思想問題　上田敏著　金一圓三十錢

▲群衆論　樋口龍峽著　金一圓卅錢

▲西洋文明史　セーニョーボス著　煙山專太郎譯　金一圓六十錢

▲三つの死　トルストイ著　加能作次郎譯　金四十五錢

▲チョコレェト兵隊　ショウ著　伊庭孝譯　金四十錢

■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢、一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵税を要す。
■郵券代用は五厘切手に限る。但し一割増の事。
■廣告料特別一頁十五圓、普通十圓。
■本社振替貯金番號一七一六三。

大正二年九月三十日印刷納本
大正二年十月一日發行

編輯兼發行人　府下大久保百人町三五二　近代思想社内　大杉榮
印刷人　府下大久保百人町三五二　荒畑勝三
印刷所　京橋區銀座四丁目一番地　敎文館印刷所
大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

地六社復刻版

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

バアナアド・ショウ作　伊庭孝譯

理想的飜譯出づ!!

新刊

チョコレエト兵隊

▲四六判二百頁
▲定價金四十錢
▲郵税　金四錢
▲地圖一挿入

ショウが劇の特色は、その痛烈なる皮肉と、辛辣なる諷刺と、而して眞摯なる熱情とに在り。ショウが傑作と稱すべきもの、多くは此の皮肉、諷刺、熱情を以て、一世を擧けて迷信熱狂せる帝國主義愛國心の偶像を破壞せんとするに非ざるは莫し。就中、『チョコレエト兵隊』の如きは、著者の特に題して『非武士道劇』と云ひし程ありて、獨特の皮肉諷刺は、一層の光と力と鋭さとを示す。蓋し偶像崇拜者に對する挑戰的態度を、最も强烈に現はせるの作也。伊庭孝氏本月中旬之を有樂座に上場するに當り、新に自ら譯出せる處にして、最も自信ある飜譯なり。猶ほ伊庭孝氏の論文、『愛國心の由來』一篇を附錄とす。

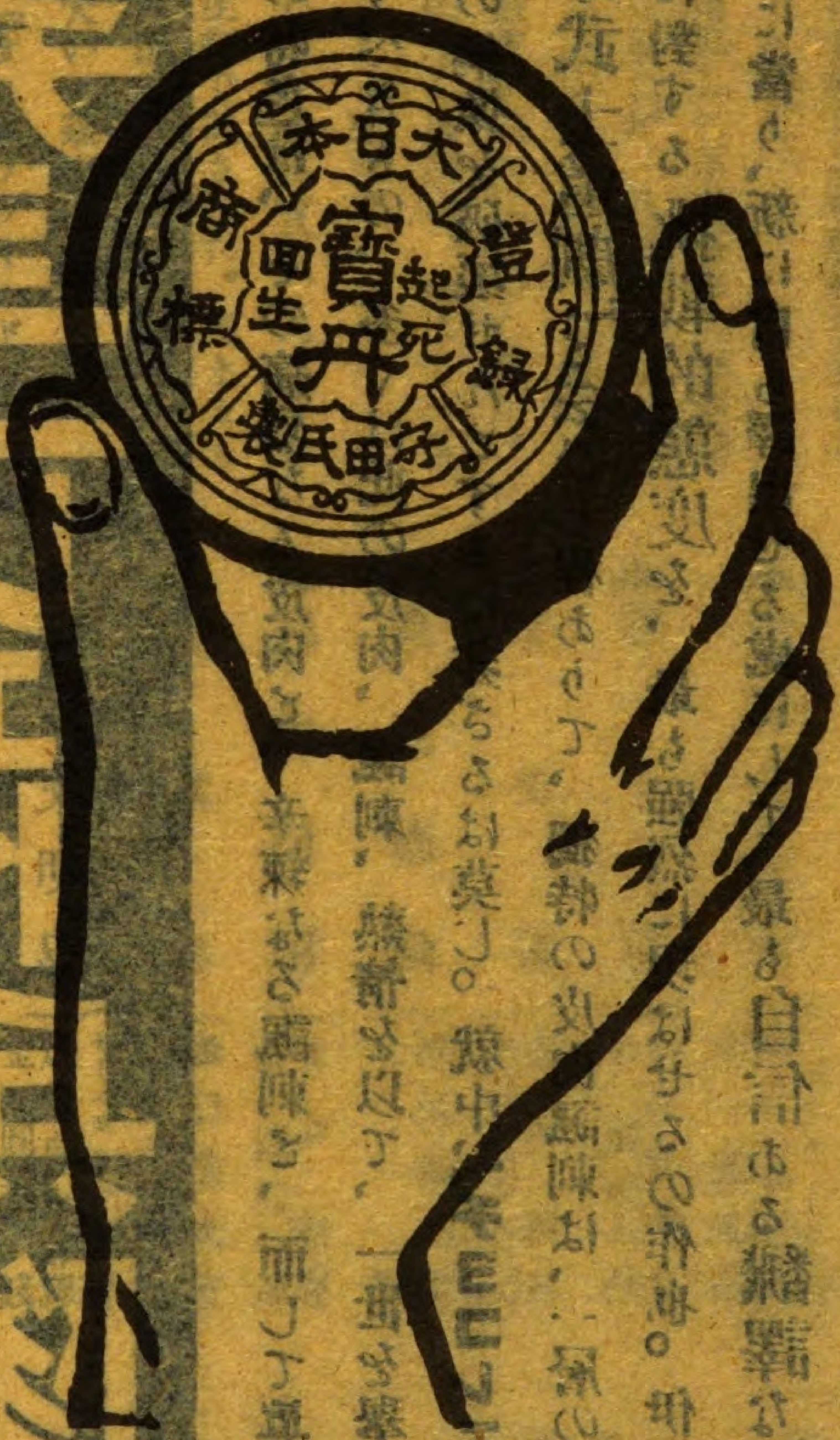
東京市京橋區尾張町二の十五

發兌元　警醒社書店

振替東京五五三番

起死 守田寶丹 回生

此の頃の天氣の鬱陶しさには、頭痛がして不愉快なものです。それには、信用昔より渝り無き、守田寶丹が第一でございます。



是れから追々寒くなるに従ひ、誰も風を引き易くなりますが、それには服易くて効能確實な、守妙に越す妙藥はありません。

守妙
金五錢（一貼入）
金十錢（三貼入）
金廿五錢（六貼入）
金五十錢（十二貼入）

守妙　振り出し

寶丹
金十錢
金廿錢
金卅錢
金五十錢
金壹圓

金三十錢以上の分には寶丹匙を添ふ

寶丹寶丹錠本舗

守田治兵衛

東京市下谷區池の端仲町廿七番地

賣文社

作文、反譯の業一切

務を取扱ふ猶圖案意匠

部寫字部速記部等の設あり業務親切

丁寧迅速近地は御申越次第社員參上

御用命を伺ふ營業案内

御入用の方は往復葉書にて申込あれ

東京市京橋區南佐柄木町三

堺利彦

人若し薬を需めんとせば須く撰擇を要す

清心丹の三大特色は

一、効能の確實

二、品質の善良

三、價格の低廉

主治効能

心思鬱憂、頭痛眩暈、胸痛腹痛、過酒過食、悪心嘔吐、溜飲、宿食、中暑中寒、下痢、疝痢、舟車不快、喀痰咳嗽、咽喉不調、歯痛口臭

定價 壹圓箱入 五拾錢箱入 參拾錢罐入 拾五錢罐入 拾貳錢瓶入 貳拾錢紙包 拾錢紙包 五錢紙包

本舗 東京市日本橋區元大坂町八番地 高木與兵衛

近代思想
第二卷第一號
大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正二年九月三十日印刷納本（大正二年十月一日發行）
十月號
金十錢

活動の朝のライオン歯磨

旅行にはライオン煉歯磨を！

家庭ではライオン粉歯磨を！

休息の夕のライオン歯磨